

急性脳炎後遺症のある自閉スペクトラム症 女兒への学習動機づけ支援

環境調整と認知的教育支援を通じた課題従事促進の検討

岡村恵里子

岡崎慎治

（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

（筑波大学人間系）

KEY WORDS: 学習動機づけ、環境調整、認知教育

（目的）

脳機能の障害という共通点を持つ発達障害や高次脳機能障害の子どもは、学校生活において不適応を起こしやすい（太田，2014；加茂・東條，2013）。さらに、特性や障害と環境との調整不全によって学習空白が生じた場合、学校のみならず学習への動機づけが低下することも起こりうる。本事例は、幼少期の急性脳炎後遺症として高次脳機能障害の影響が推察される自閉スペクトラム症（以下、ASD）の女兒 1 名を対象として、学習への動機づけを高めるための環境調整および認知教育支援方法について検討した。

（方法）

（1）対象児

A 大学教育相談に来室している女兒。1 歳 6 か月時にロタウイルス感染症による急性脳炎に罹患し、現在もてんかん治療中であるとともに、ASD の診断を受けている。高次脳機能障害の鑑別はされていないが、協応運動の苦手さや相貌失認の自訴がある。小学低学年で来室した当初の主訴はこだわりや変化への対応の困難さだったが、小学 5 年生で転校後に徐々に不登校となった。思春期以降は脳波異常とともに神経疲労の兆候（過眠など）が見られ、感情の起伏がさらに大きくなっていた。生活面では低活動状態を示し、疲労や腹痛などの身体症状も見られていた。11 歳 9 か月時点の WISC-IV（VCI と PRI は比例計算）の結果は、FSIQ91、VCI93、WMI109、PSI99 であった。なお、本研究の実施及び公表に当たっては、保護者から同意を得た。

（2）支援開始前の状態像

不登校以前は学習に遅れはみられなかったが、不登校以後は学習の機会があまり無く、学習への動機づけも低下していた。また、感情の不安定さが目立ち、当相談でも小さな変化や本人の思い込みをきっかけとして激しく泣く場面も見られた。課題従事については、用意された課題に最後まで取り組もうとするものの、思春期以降は日によって波があり、難しそうに見える課題や正答が明確でない問題には取り組みず、パニックを起こすことがあった。パニックの時は、母親をよりどころとしてカームダウンしていた。

（3）支援内容

支援の目標として、当相談での学習課題に主体的に取り組めるようになることを設定した。具体的には、①**環境調整**：対象児の興味・関心を媒介として既習知識を活用でき、エラーレスで取り組める課題設定、②**認知教育手法**：支援者と共同で取り組む作問によって、ラポールを取りつつ知識やプランを引き出す方法を主に用いた。

（4）課題設定

特性に応じた配慮として、児が比較的得意とする算数を学習課題とし、日常生活でなじみのある買い物の文脈を使用した。エラーレスで行えるように、作問の前には練習問題を数問実施した。神経疲労および変化への弱さに配慮して、毎回課題の流れを一定にし、課題は 10 分程度で終わる量にした。

（5）支援の流れ

指導のうち 4 回のセッションを検討対象とした。1 回目の事前アセスメントでは買い物文脈の算数文章題への課題従事を調査した。2 回目の練習試行では、児の好みを反映した内容で文章題を解く練習を行い、続く 2 回の本試行では、既習内容である足し算と、多少の知識はあるが完全には習得されていない割合を題材として作問課題を実施した。支援期間は、20XX 年 10 月～20XX+1 年 1 か月であった。事前アセスメントから本試行 1 までは約 2 か月間隔、本試行 2 は約 8 か月後に実施した。

（結果）

事前アセスメントとして行った、ピザを題材とした課題では、「ピザはやだ」と言っており、課題を開始するまでに 20 分程度時間を要した。次に行いたい題材の聞き取りでは、「グミ、チョコ」と答えたため、続く練習試行ではお菓子を題材とした課題を導入したところ、抵抗を示すことなく課題に取り組んだ。また、お菓子を題材とした課題では毎回、支援者と好きなお菓子について 10 分程度雑談をした。本試行ではお菓子を題材とし、課題従事は良好であった。

本試行 2 の割合の練習問題では計算方法を想起できなかったが、支援者が割合の計算方法を教えると、計算した答えを合計金額から引くという手続きを思い出すことができた。作問では毎回、問題を作るまでに 5 分程度悩んでいたが、支援者が「誰が買うことにする？」などのプロンプトを出すことで徐々に設定を決めていき、最終的に練習問題を参考として問題を作った。対象児は、作った問題を解いてもらう相手として、毎回母親を指名していた。

課題後の感想として、事前アセスメントでは回答を拒否したが、練習試行は「グミが 3 つ買えてよかった」、本試行 1 は「問題作りが難しかったです」、本試行 2 は「もんだい作るの楽しかった」と書いていた。

（考察）

本稿では、学習への動機づけが低下した、急性脳炎後遺症の影響が示唆される ASD 児童に対して、環境調整と認知教育によって主体的な課題従事を促した。本事例では ASD と脳炎後遺症との影響を弁別しなかったが、課題量の調整や見通しの持てる課題設定など両者に共通する配慮によって課題従事へのハードルを下げる効果があったと想定される。そして、環境調整として対象児の興味に沿った題材を聞きとり本人の同意を得ることで、抵抗感なく課題に取り組むことにつながり、認知教育手法によって支援者とのやり取りを通して練習問題や作問に取り組むことで既習知識を想起し、活用するきっかけとなった可能性が考えられる。

（文献）

太田令子（編著）（2014）わかってくれるかな，子どもの高次脳機能障害 発達からみた支援．クリエイツかもがわ，加茂聡・東條吉邦（2013）発達障害に見られる不登校の実態と支援に関する研究—広汎性発達障害が中心に—．自閉症スペクトラム研究，10，29–36．

（OKAMURA Eriko, OKAZAKI Shinji）